

特集

呼吸器画像診断 —エキスパートの視点—

呼吸器疾患の診断に胸部画像診断が大きな役割を担うことはいうまでもない。ただし画像所見はあくまでも影絵であり、また多くの鑑別疾患を列記しうることから、確定診断のためには追加検査を行うことが求められる。医療資源に恵まれているわが国においては、比較的容易に画像診断を実施することが可能である。また診断、および治療を担当する呼吸器科医が画像診断の主体者でもあることから、総合的な画像所見の解釈が蓄積されてきた。一方、米国では、画像所見の読影を放射線科医が行うため、画像所見の全体的解釈に乏しいように感じている。

今回、呼吸器画像診断のエキスパート医師は、読影の際に、どのような視点で行い、また鑑別診断を行うのか、という観点で本特集を組んでみた。本特集で選択した疾患は、いずれも日常診療で遭遇するありふれた疾患であり、希少疾患についての記載は最小限とした。またⅠ．総論、Ⅱ．感染症、または感染症と鑑別すべき疾患、Ⅲ．間質性肺疾患、またはびまん性肺疾患、Ⅳ．慢性閉塞性肺疾患、およびⅤ．腫瘍性肺疾患の5つに分類した。各項目のタイトルは、近縁疾患との鑑別のポイントを明確にするようなタイトルとした。

総論においては、画像所見から、肺に起こっていることの病態生理を理解できる可能性を示した。画像所見はパターン認識であり、このパターンから理論的に疾患の病態生理を推測することが可能になることを示した。各論のⅡ.～Ⅴ.に示される呼吸器疾患の分類は、きわめて多彩で多くの疾患が含まれる。ただし実際の肺の構造はきわめてシンプルであるから、病変の場と病態を正確に理解できれば、呼吸器疾患の鑑別を理論的に実施しうる。また疾患の進展に時間軸（急性、亜急性、または慢性）を加えることで疾患の理解、画像所見のより深い解釈が可能になる。例えば感染症の多くは急性疾患であるし、また喫煙、粉塵吸入などによる肺病変はその多くが慢性疾患となる。編集に際しての工夫として、各論の各項目においては、日常臨床で疑問に思うことを設問形式で示し、その疑問に答える形での執筆をお願いした。この設問は、私自身の呼吸器診療において問い続けてきた内容でもある。

ご執筆していただいた先生方はそれぞれの分野でエキスパートとして活躍されている方々である。また貴重な画像所見を満載した実践的な原稿が集まった。本特集が「これから専門医を目指す若手呼吸器科医」の先生方に役立つことを心から願っている。

琉球大学医学部附属病院 病院長 藤田次郎